

カトリック仙台司教区・ **カリタスジャパン** 東日本大震災救援・復興活動ニュースレター

発行人：平賀徹夫 編集：小松史朗
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

東日本大震災から、もうすぐ丸3年を迎えます。被災された方々の3年間は、筆舌に尽くしがたい思いを抱えての3年間だったことでしょう。各カリタスベースも、それぞれ地域の方々のニーズに応えながら支援活動をおこなってきました。大槌ベースは、ベースそのものの移転という転機を迎え、大船渡ベースと米川（南三陸）ベースも、がれき撤去の支援を終え、日々、被災者の方々に共に寄り添っていく活動が主となっています。4年目から、さらにその先に目を向け、歩もうとするベーススタッフたちにご協力をお願いいたします。

カリタス大槌ベース移転

カリタス大槌ベース 片岡 英和

カリタス大槌ベースは、2011年12月13日より岩手県大槌町末広町の被災したホテル「ビジネスホテル寿」で活動してきましたが、2014年1月15日をもって桜木町の一軒家へ移転しました。地盤をかさ上げするための工事を行うということで、「ビジネスホテル寿」の建物自体を解体するためです。



被災したホテルの片付けをする
釜石ベースのボランティアさん
(2011年7月)



被災したホテルを釜石ベース（現カリタス釜石）のボランティアががれき撤去を実施してくれた後に訪れました。

津波で襲われた跡が生々しく想像を絶する光景を目にしたことを覚えています。寿ホテルの場所が被災地の真ん中であることも考慮して、ベースとしてはどうなのかという話もありましたが、この真っ暗なところに灯りを灯してほしいとの願いがあり、ベースとしての場所に決定しました。そこから12月までの期間はベースの補修工事に邁進し、なんとか開所にこぎつけました。もともとホテルということもあり、40人を超える人数のボランティアを受け入れることも可能で、60人近いボランティアを受け入れたこともありました。

2012年の8月には、日台共同プロジェクトということでホテルの外壁に壁画を描くという『希望の樹』プロジェクトが行われ、大きな樹とひょうたん島（蓬莱島）・虹・鮭などが描かれました。大槌の入口の交差点からも確認することができる、大変大きな壁画です。

ベースの周りではどんどん解体が進み平地になっていく中、壁画が描かれたベースはひととき目立つ存在で、スタッフとしてもこのまま建物自体が存在していくものかと思いついていました。しかし被災地の真ん中にある建物として、復興計画が進めばなくなるというのは必然でした。ホテルのオーナー道又氏も当初は残そうと考えていたようですが、やはり現実的には厳しく、2013年の夏には解体するという意思を固めたようでした。

何も無い被災した建物で始まった活動は、新しいステージに移行します。2年以上も過ごし、ボランティア総数1,799人（延べ人数）を受け入れてくれた建物では今、解体が始まりました。やはりなんとなく物悲しい気持ちがこみ上げてきますが、感謝の気持ちを込めて見送りたいと思います。

これからは桜木町の新ベースでの活動になります。規模的には縮小されますが、いろいろな方々からのご協力をいただいていることに感謝の気持ちを忘れず、被災者のため、またスタッフはボランティアに来てくださる方々のためにも頑張っていこうと思います。ご支援、ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。



2013年をふりかえって・2014年に向けて

【大船渡ベース・米川ベース】

これから求められること

カリタス大船渡ベース 深堀 崇

2013年を振り返ってみると、多くの方々との関わりの中で活動ができてきたと思います。在宅訪問での繋がり、そこから広がる支援の輪。私たちの活動を見ていて、信頼していただき相談を受ける件数も増えた年でした。個人のお宅の中での活動などは、信頼関係がないとお願いできないことだと思います。

大船渡では、社会福祉協議会のボランティアセンターが中心になって行っていた「がれきの撤去」や「泥出し」の作業は、2013年の初めごろにはなくなり、災害ボランティアセンター自体も2013年の3月末で閉鎖になりました。体をつかった支援活動というのは減っていき、寄り添っていく活動に変わっていく年でした。



2014年の活動は、大きく3つの活動になっていくと思います。

①自宅再建された方・在宅被災者への見守り活動、②仮設住宅での生活を余儀なくされている方々への訪問活動、③個別依頼への対応、の3つです。街の復興が見えない中で、支援団体の引き上げや補助金の打ち切りなどにより生活が苦しくなり、先が見えなくなっています。そのような中で私たちができることは、寄り添って共に歩ませていただくことだと思います。被災された方の内から出てくる力を、倒れないように支えていくことが大切になります。



いま私たちに求められることは、この地で長く寄り添っていくことです。被災地のことを忘れていないという事を、被災地に残り伝え続けることが大切になってきました。また、遠方の方々への広報活動も大切になってきます。震災から3年、被災地では毎日テレビで流れる震災関係の情報も、被災地外では3.11に合わせて流れるだけになってきました。復興は進んでいない、まだまだ困っている方々が大勢いらっしゃるという事を伝え続けていかなければなりません。支援に入っている私たちだからこそできる、外に現状を伝えるという事が求められていくことになると思います。

被災された方を支え寄り添っていく力は、現地にいるスタッフのみでは足りません。皆様のご協力とお祈りがあって成り立っているのです。今後ともご支援をよろしくお願いいたします。



米川ベースが米川ベースであること

カリタス米川ベース 荒川 直人

「肉体労働の米川ベース」

ボランティアさんからそう評されることが多いほど、がれき撤去や農業支援など、外での活動が多いカリタス米川ベース。2013年度も沢山のボランティアさんのご協力のもと、多くのがれきや石を片付け、町を綺麗にしていくことが出来ました。

そのような中で、県と町の方針で、2013年12月をもって、撤去作業は一応の区切りを見せることになりました。現在の米川ベースは「農業支援」、「漁業支援」、「仮設支援（お茶っこ）」が活動の軸となっています。

月日が経つごとにボランティアが少なくなっていき、長い間南三陸のボランティアセンター（ボラセン）を支えてくださっていた長期ボランティアリーダーたちも、2013年度に入るとほとんどが元の生活に戻り、現場を開き、回していく人手が少なくなりました。そのような中で、米川ベースとボラセンは、今までよりもさらに密接に関わるようになり、互いに連絡を取り合い、ミーティングを開き、現場を回していく中で、「共に活動する」という意識をより強くもつことが出来るようになったと思います。

また、2013年度は南三陸だけではなく、気仙沼のボラセンの活動にも参加するようになりました。作業内容は、海岸清掃がメインで、オリエンテーションや作業の進め方など、南三陸とは異なる点を含め、学ばせていただくことも多いです。ベースからの距離は、気仙沼ボラセンも南三陸ボラセンもほとんど変わりません。両ボラセンの中間地点にある米川ベースにとって、今まで気がかりではありつつも南三陸で手一杯だったことから、ようやく気仙沼ボラセンにおでって（お手伝い）に行くことが出来ることを嬉しく考えています。



ハード面だけでなく、ソフト面に関しても、お茶っこに通わせていただくようになった仮設は、2012年の倍以上となりました。南三陸の中でも特に目が行き届かない仮設を中心に交流を持たせていただいております。そのような中でも、2013年秋から始めた仮設の戸別訪問による清掃活動「おそうじボランティア」は、仮設の方々のコミュニケーションの機会ともなり、私たちにとっても、仮設の方々にとっても、意味のあるものとなりました。

また、子ども関係のお手伝いも増えました。仮設のお茶っこの中で子どもたちと触れ合うことはもちろん、幼稚園の保育補助、障がい児の放課後預かり、またそこから他グループの託児のお手伝いや、米川の地元のお母さんグループの子どもを対象とした企画のお手伝いもさせていただきました。少しずつではありますが、活動の幅に広がりが出てきている。そのように感じられる1年でした。

ですが、これらの活動、ニーズは、今までそうであったように、

私たちが日々被災地の中で人々と接する中で、あがってきたものをそのまま形にしている、もしくは応じる形での寄り添いであることに変わりありません。

2014年度も、これから先も、「共に寄り添う」ことを大切に、日々自分たちに出来る事を一所懸命に行っていこうと考えています。

